家 庭 科

藤 本 文 乃

1　家庭科における「創発の学び」とは

家庭科の学び

家庭科は、自分たちの生活をどうするかという視点で学ぶ教科である。家庭科の学びは、家族の一員として、自らの家庭生活をよりよくしようとする実践力、実践的な態度を身につけ、暮らし方を自己決定できる力を得ていくことだと考える。自分の家庭生活を見つめ、自分が「ひと・もの・こと」と深くかかわり、家庭生活を営んでいることを知る。また、他者の家庭のあり方は一様ではなく、さまざまな家庭生活があり、それぞれが工夫して生活していることを知り、自分らしいよりよい家庭生活を営むことへの関心が芽生える。そして生活にかかわる課題をもち、それを実践的・体験的活動を通して解決していくことを通して、生活に必要な基礎的知識、技能を身につけ実践力や実践的態度を育んでいくのである。

よりよい家庭生活

＊1　家庭生活を一緒に営んでいる家族や地域の人や広く社会環境をも視野に入れたものと考える

社会とのかかわり

「よりよい家庭生活」とは、「健康に」「楽しく」「便利に」など、多様な価値のとらえ方がある。しかし、それは独りよがりのよさではなく、自分の周囲(*1)との相互の関係のうえに成り立つものである。それゆえ、生活に関する課題を持ち解決すると言っても、個人的な問題や家庭の中での自助努力、処理方法を学ぶだけに留まるのでは、生涯にわたって続く暮らしを主体的につくり出す力とはなり得ていかないのではないだろうか。「なぜそうするのか」「自分の生活はなぜこうなのか」という生活の営みにこめられた意味や背景、文化、価値観、社会からの影響などに気づくことが大切である。自分の家庭生活と社会は相互に影響し合っていることを、子どもの発達段階に応じて学びの中に取り入れていく視点が必要であると考える。社会的に解決が求められる課題も視野に入れながら、身近なところから行動できる力の基礎を育てていきたい。

家庭科における創発の学び

そこで、以上のことをもとに家庭科における「創発の学び」を、次のように定義する。

> **「ひと・もの・こと」とかかわり合い　家庭生活への見方　考え方を広めたり深めたりすることを通して　よりよい生活の仕方を身につけ暮らし方を自己決定していこうとする営み**

2　家庭科における「学びを深めようする思い」とは

家庭科の大きな特徴である生活課題に取り組む学習において、大切にしたい「学びを深めようとする思い」は次の２つであると考えた。

> **(1)家庭生活に対する見方・考え方を広げて生活の営みへの理解を深めようとする思い**
> **(2)自分の生活の向上をめざして自己決定して取り組もうとする思い**

授業場面に即して考えると次のようになる。

家庭生活の認識

(1)家庭生活に対する見方・考え方を広げて生活の営みへの理解を深めようとする思い

・生活の中にある意味や工夫などを実践的・体験的活動を通して調べようとする
・家族や家庭生活に関する多様な見方・考え方を得ようとする
・家庭生活の課題は社会とかかわっていることに目を向けようとする

自己決定と実践力

(2)自分の生活の向上をめざして自己決定して取り組もうとする思い

・よりよい生活の仕方を自分で判断しつくり出そうとする
・友達の取り組みのよさを認め自分の生活に生かそうとする

3　「学びを深めようとする思い」を育むために

(1)　自分なりの課題意識を大切にする

課題の共有

家庭科の学びのフィールドは家庭生活である。子どもの生活から出発することを大切にする。子どもが普段何気なく家庭生活の中で目にしたり、してもらったり、行ったりしていることを見つめさせる。じっくり見つめたり、視点を変えて見たりすることで、驚きや発見、疑問などが生じる。しかし、その多くは、漠然とした直感的なものであり、課題意識まで高まってはいない。その思いを集団の中で出し合い、比較しながら聴き合う中で、他の家庭生活の仕方やかかわり方を知り、共通点や相違点が明確になり、追求意欲が高まってくると考える。そして、自分の家庭生活に対する思いや願いを出し合う中で、個々の家庭生活をよりよくすることにつながる課題の共有化・焦点化が図れるようにする。さらに、見通しをもって子どもが課題を追求することができるように学習計画・授業を工夫していく。子どもが共同で課題解決に取り組み、多様な認識の交流を行ったり、友達の知識、技能などからの刺激を受けたりすることで、子ども自身が、何がよりよいかを自己決定するための選択肢を広げていくことができると考える。

(2)　過程を大切にする

実践的・体験的活動

課題を解決していく過程では、実践的・体験的な活動を多く取り入れ、具体的な実感を伴って学習ができるように工夫する。調査、実験、試し作りなど多様な活動によって生活を科学的に認識し、学びを生活と結びつけることになると考える。また、学び合い、試し合い、教え合いなど友達との交流、相互のかかわりなど相乗効果が高まる場を設定し、自分の見方、考え方、方法を再構築できるようにする。また、課題を解決したり実践したりしていくときには、それを支える知識や、技能が必要となる。課題解決に取り組む活動の中で知識を得、技能を身につけていくようにする。

(3)　家庭実践を大切にする

学びを通して得た自分の考え方、知識・技能を、自分の家庭生活に生かすことができるような場を設定する。実際にやってみることで、これまで学んできたことの価値を実感としてとらえることができ、やってみることを通して新たな課題をつかむこともできる。家族からの評価も生かしながら自分のよさや高まり、可能性を自覚できるようにする。

家庭実践カード

学習したことを生かし、家庭で実践したことは家庭実践カードにその様子と自己評価を記録し、家族からの評価も書いてもらう。こうした自信、意欲という情意面へ働きかけ、実践しようとする意欲や実践力が高まっていくようにする。それを学級通信や実践発表会を開いて広めていく。そして友達や教師からの評価も加え、互いのよさやがんばりを認め合い、自己有用感を高めていく。この過程を継続していくことで、よりよく生活しようとする思いが内面化され、自信を持って自分の生き方を自己決定していくことにつながると考える。

(4)　見取りと評価のフィードバック

学習の過程での評価

毎時間ごとのふりかえりに学びに応じた自己評価、他者評価、相互評価のいずれかの場を設定し、自己の高まりや友達と学ぶよさの自覚を促すようにする。題材によっては、その方法や評価の規準を子どもとともに考えていくことも行い、子どもが見通しを持って学習を進めることができるようにしていきたい。その際には、「経験」それ自体だけではなくて「経験を通して何を学べてか」を評価することができるような工夫も行いたい。単元の終わりにはもう一度記録しておいたものをふり返ることにより、新たな知識や技能を習得した自分、自分なりに工夫して解決しようとした自分への気づきや次の実践や学習の意欲につなげたい。

4　実践例　―5年―

(1)　題材名　生活は自分が主人公　～身の回りを整えよう～

(2)　目　標

・便利で気持ちよく生活するために整理・整とんの必要性が分かり、自分なりに工夫して身の回りを整えようとする。
・ものとのかかわりやものに対する価値観などについて自分なりに考えることができる。

(3)　指導にあたって

①　題材のとらえ

本題材は、家庭科学習の導入題材として、自分や家族の生活に関心を持ち、家庭生活に関する仕事を体験させることを通して、自己有用感を味わわせ自分も家庭生活の担い手であるという自覚を育てる学習の一つである。「家庭生活ウオッチング」によって家庭生活について見つめ直した学習を受け、今度は自分が生活している場所・空間に目を向け、整理・整とんという「ものとのかかわり」を通して家庭生活への関心を高め自分の生活の仕方をふり返っていけるようにしたい。

整理・整とんは子どもにとってはあまり興味・関心の高いものではない。子どもの学校生活の様子を見ても、ホワイトロッカーや後ろの棚の中が乱雑になっていたり、持ちものが在るべき所になかったりしても気にかけておらず、機能的なことを考えてものを片づけようという意識は弱い。しかし、整理・整とんは、行った結果がはっきりと目に見え、やり終えた後の爽快感も大きく、家庭での実践に継続して取り組める。また、いらなくなったものは簡単に捨てる、売るといった考え方で生活している子どもに、有り余るほどのものの存在に気づき生活の仕方そのものを考える場や、社会へ目を向けるきっかけを与えることができる題材であると考える。

②　本題材における「学びを深めようとする思い」

ア　友達と家庭生活や家族に対する見方・考え方を広げて生活の営みへの理解を深めようとする思い

・友達と整理・整とんの仕方を交流し自分のやり方をふり返り、友達のよいところや自分でもできそうなことを取り入れようとする。
・たくさんのものに囲まれている生活の現状について考えを友達と交流し合い、自分の生活の仕方を考えようとする。

イ　自分の生活の向上をめざして自己決定して取り組もうとする思い

・友達のよいところを取り入れたやり方を生かして整理・整とんし、これからも続けようとしたり、他のところに取り組んだりしようとする。

③　「学びを深めようとする思い」を育むために

初めての家庭科の学習が始まり、子どもは「料理をして何か作りたい」「裁縫セットを早く使いたい」などの思いを強く持っている。話し合いが続くと「今日は何かしないの」といったことを尋ねてくる子もおり、生活に対する認識を深めよりよい生活の仕方を考え実践しようとすることよりも、製作する、技能を身に付けることが家庭科の学習であるというイメージが強いと思われる。それでも、子どもは「生活ウオッチング」の結果を友達と交流し互いの意見を出し合うことで、新しい見方や考え方が得られることを少しずつではあるが感じ始めているようだ。しかし、自分の考えを発表することには意欲的であるが友達と考えを高め合おうとする思いが弱く、また中には自分の思いを素直に表出することが苦手な子もいる。そこで本題材では次の手だてをとりながら、家庭科の学びを深めようとする思いを育んでいきたいと考える。

まず、何気なく過ごしていることを改めて見つめたり考えたりする場を設定し、整理・整とんに関する自分の問題点をとらえることができるようにする。始めに子どもが共通体験できる教室の机の中、ホワイトロッカー、棚の様子を見つめさせ問題点や自分の思いや願いを話し合った後、実際に整理・整とんを行ってみる。その体験を通して生活の主人公となるために自分で身の回りを快適にしようという学習課題を設定したい。課題解決に当たっては、インタビュ

一や観察など実践的・体験的な活動を取り入れ、実感を持って学習できるようにする。そして、課題解決の過程で分かったことや困ったこと、整理・整とんの仕方や工夫などを交流する場を設け、よさを認め合ったりアドバイスしたりするようにする。そのことから、友達のよさを取り入れ自分のやり方を見直し新しいものの見方を得て、よりよい方法をさらに工夫し自分の生活に生かしていこうとする意識を高めたい。家庭実践に対しては自己評価だけでなく家の人や友達からの評価をもらうことや、継続するにはどうしたらよいかを考えさせることで次の実践につなげたい。さらに学習が体験で終わらないためにも、視点を変えてものの多さに注目させる。他の国に比べて身の回りにあふれんばかりにものがあることや、ものに関するいろいろな意見を交流し、ものに対する価値観や生活の仕方を考える機会にしたい。

(4) 学習計画（総時数５時間）＋課外

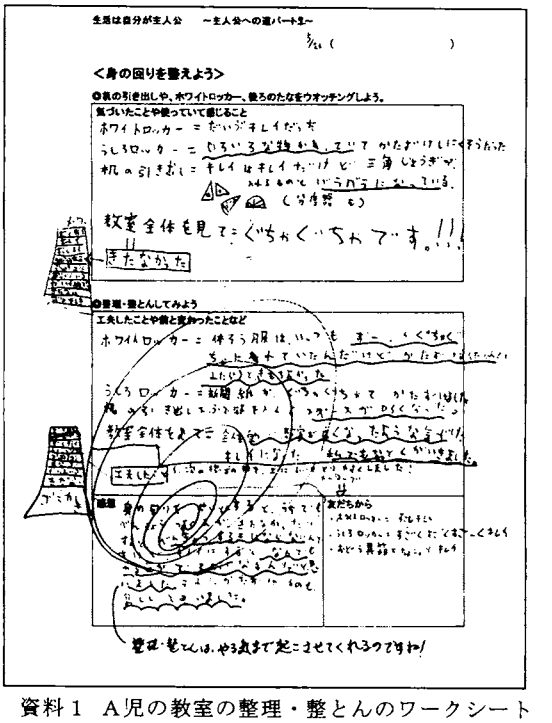
主な活動と内容	評価のポイント
1　学習課題をつかむ ○教室での自分の身の回りを見つめ問題点を話し合う ・ぐちゃぐちゃで取り出しにくい ・必要のないものやごみがある ・整理・整とんをした方がいい ○机の中やロッカーを整理・整とんし　気づいたことや問題点を出し合い課題をつかむ ・ちょっと工夫すると取り出しやすくなった ・大きさの順に並べると見た目もよくなった ・３日坊主にならないようにするにはどうしたらよいかな ・よい方法を見つけたい 身の回りを整理・整とんし快適にしよう	自分が生活する場所の問題点に注目しよりよくしようという意欲を持つことができる
2　課題に取り組む ○家庭で自分が使うところの整理・整とんに取り組む ・ウオッチングして問題点を見つけよう ・上手な人や家族に聞いたり本やインターネットなどで調べたりしてよいやり方をゲットしよう ○友だちと調べたことを交流し　工夫やアイディアを増やす ・○○さんの方法は自分も使えそうだやってみよう ・牛乳パックや空き箱なども使えそうだ ・これからの実践について考えよう ・工夫して整理・整とんに取り組もう	よりよい整理・整とんの仕方を進んで調べたり考えたり試したりしようとしている 友だちとの交流を通して友だちのよさや工夫を見つけ自分の生活に生かそうとする
3　ものについて考える ○日本とイタリアの生活財の写真から　ものがたくさんある自分の生活について考える ・日本人はたくさんものを持っている ・イタリアの家庭はものが少ないようだ ・日本の方はなぜたくさんものを持っているのかな ・不必要なものを増やさないようにしよう	ものに対する考え方や価値観について友だちの意見を参考にしながら自分なりに考えようとしている
4　実践報告会とこれまでの学習のふりかえり ・前よりも上手にできるようになった ・家の人にも誉められてこれからも続けたい ・友達もよく工夫しているな ・○○の整理・整とんに友だちの方法を取り入れてみた ・身の回りが気持ちよくなってよかった	これまでの学習を生かし自分の生活をより快適にすることができる

(5) 本題材における授業の実際と考察

子どもが本題材において「学びを深めようとする思い」を育みながら、学びを高めることができたかを、「学びを深めようとする思いを育むために」の４つの観点を基にして考察していく。

① 自分なりの課題意識を大切にする

子どもが自分の身の回りがどうなっているかを見つめ課題を持つために、全員に共通した場である学校の机の引き出しの中や、後ろのロッカー、ホワイトロッカーの様子の観察から学習に入った（資料１）。その結果、「引き出しの中にいらないものがある」「少しごちゃごちゃになっている」「後ろロッカーにものを押し込んである」「ホワイトロッカーは、見た目はきれいだけど体操服はぐちゃぐちゃに袋に入れてある」などの気づきがあった。子どもは毎日の生活で使っているものに問題点があることを発見し、きれいにしたい、使いやすくしたいという意欲が高まった。教師の予想外だったのは、体操服に対して「早くした方が良いとお母さんが言う。たたんでいると遅くなるから、ぐちゃぐちゃになっても袋につっこめばよい」という意見が出たことである。他の子どもは、何かおかしいな、たたんだ方がよいのではという思いであったが、その子の意見を否定もできなかった。そこで、とにかく整理・整とんに取り組んでみてもう一度考えることにした。



資料１　A児の教室の整理・整とんのワークシート

多くの子どもが、プリント類をファイルにはさむ、ものの大きさを考えて入れる、向きを考えて入れるなどの工夫を行っていた。中には、紙を折って小物入れを作る、スライドしてものを引き出せるようにするといった工夫もあった。それを交流することで、子どもに整理・整とんもいろいろ工夫ができそうだなという思いが高まった。また、体操服に関しては、「たたむと体育袋がロッカーの中で幅をとらなくなった」「たたんだ方が着る順番に取り出しやすくなった」「しわがあると次に着にくい」という意見が出た。そこから、整理・整とんを行うときの大切なポイントである、しまうときは次に使うことを考えてしまう必要があること、きれいさ、見た目のよさも考えることに気づくことができた。自分の家庭生活の様子から発せられた意見から学びが深まったといえよう。早くした方がよいと発言した本人もたたんだ方がよいということに納得していた。実際に体験することでほとんどの子が短い時間でも整理・整とんを行うと機能的で気持ちがよくなることを実感できた（資料２）。そして「自分の身の回りを整理・整とんして快適にしよう」という共通課題を設定し、生活の主人公となることをめざして自分の課題場所を快適にしようとつなげていった。

A児：家でも勉強机がきたなかったりすると勉強する気にならないけど、きれいにすると何でもやる気が出るようになると思った。それにかたづけるのも楽しいと思った。（大きさがそろっていてきれいになった）

B児：整理・整とんをすることでコンパクトになったり取り出しやすくなったりしたし見た目も良くなったので、整理・整とんをして良かった。それでこれからも続けていきたいなと思った。（たたんでいれてあったからとてもきれいにできていた）

C児：整とんするとものを入れやすくて取り出しやすくなった。大きさやまとめて入れることを考えた。（ちゃんと後ろロッカーのものがたてにそろっていていい）

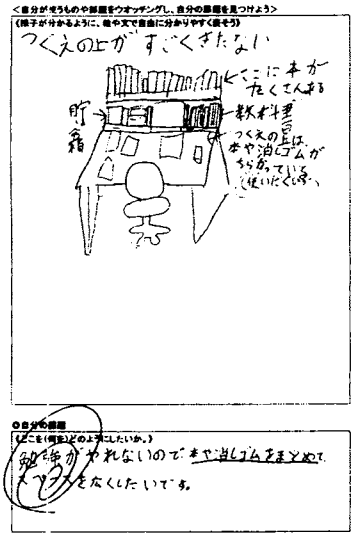
D児：きれいにするととても気持ちよくなった。特に次の体育の時はきれいにたたんだので楽しみだ。（なわとびをかけたことや上の体操着を固めたのが良かった）

E児：ちょっと工夫しただけでこんなにきれいになってうれしかった。これからは不必要なものはいらない。（とてもきれいになった）

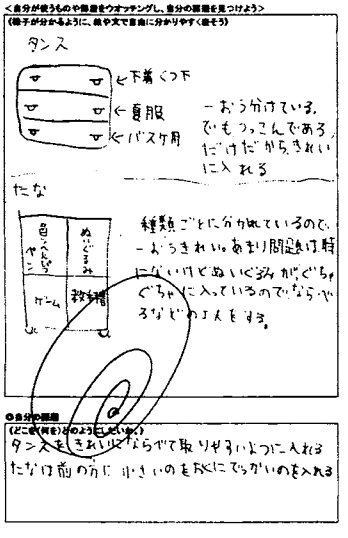
F児：家の中も整とんしたい。（きれいになった　ファイルはたてにいれたらどうか）　（友達からの評価）

資料２　整理・整とんをしてのふりかえり

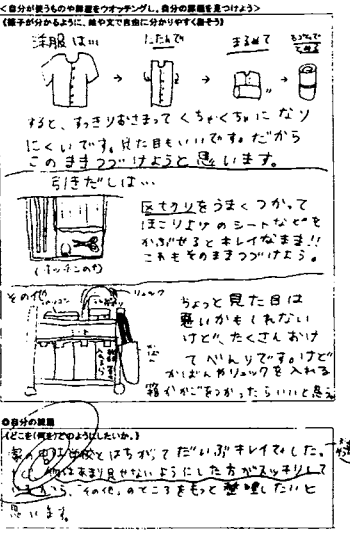
次に自分が家庭で整理・整とんに取り組むところをウオッチングして、どこ（何）をどのようにしたいか自分なりの課題をつかんだ（資料３）。Ｈ児のようにすぐに目につくからか自分の机の上に取り組む子がほとんどであった。文具や教科書などいろいろなものが机の上にあふれていて、どこになにがあるかわからない、勉強するスペースがないなどの現状から、使いやすくきれいにしようという課題を持った。他にはＩ児のようにタンスやたな、引き出しの中、自分の部屋全体を課題場所としていた。自分の部屋など主に自分が使っているところが家庭にない場合は、ほかの家族みんなで使うところに取り組むように声をかけた。Ｊ児は家庭が片づいており課題意識を持つことは難しかったようだ。しかし、家の人が行っている整理・整とんの工夫をウオッチングしてきており、友達との工夫の交流に生かしていた。家庭での実践を行う場合、それぞれの家庭状況に配慮し個に応じた対応が必要であることはわかっていたが、課題を明確にするためのより一層の支援が必要であると感じた。例えば家の人は何か課題を持っていないか聞いてくるよう促してもよかった。家庭実践が困難な場合は、学校生活の中にその場や機会を求めることとし、Ｊ児は家庭での実践は行わず学校のロッカーに再度取り組んだ。



（Ｈ児）



（Ｉ児）

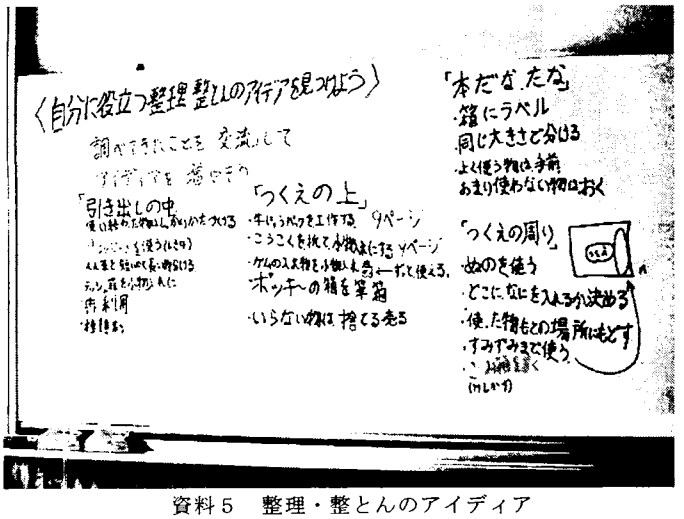


（Ｊ児）

資料３　家庭で自分の課題をつかむ

②　過程を大切にする

自分の課題を解決するためにどうしたらよいか話し合ったところ、「整理・整とんのよいアイディアを調べる」ということになった。調べる方法は、家の人や上手な人に聞く、本やインターネットで調べる、きれいに整理・整とんされているところを見てみるなどの意見が出された。そこで課外で調べることにした。多くの子は家の人に聞いて調べていたが、牛乳パックの利用を思いつき自分で試してみた子もいた。



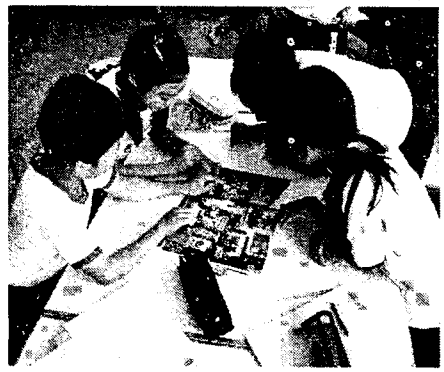
資料５　整理・整とんのアイディア

調べてきたことをグループと全体で交流したところ、教室の整理・整とんの時のアイディアと少し重なりはあったが、大きさや種類ごとに置く、大きさをそろえて置く、よく使うものはすぐに取り出せるように手前に置く、不必要なものは置かない、牛乳パックやお菓子の缶や箱・かんなどを利用する、元に戻すといったことがでた（資料５）。牛乳パックやお菓子の缶などの利用はリサイクルになるので良いととらえていた。しかし、いらないものは捨てる、売るという考えも出た。豊富なものに囲まれて暮ら

している子どもの、ものに執着しない考え方の一端や、「リサイクル」という言葉が実際の子どもの生活の実態とは結びつかないのに、知識として美化されている様子が感じられた。そこで、一層次時のものについて考える授業を大切にしたいと考えた。

次時では、日本とイタリアのそれぞれの一家族が所有しているものを、すべて外に並べて写した２枚の写真の比較を通して、多くのものに囲まれて生活していることに気づき、ものに対する価値観や考え方を深めて欲しいと考えた。

まずあふれんばかりのものがある日本の写真を提示したところ、「ゴミ屋敷や」という声が上がった。子どもはものが多くて雑然としている印象を持ち何の写真なのか興味を持ったようであった。「持ち物全部を外に出して写した写真ではないか」と一人の子が言い当てたので、その通りであることを説明し、イタリアの写真も提示した。イタリアについて場所の確認と簡単な説明を加えた後、各グループに２枚の写真を渡した。そして、ものについて着目するように、ものの数、もののちがい、その他の３つの観点に分けたワークシートを使い意見を交換しながら見比べる活動を行った（資料６）。子どもは興味を持って写真を見比べて話していた。その後、どのようなちがいがあるか全体で出し合った。



資料６　写真を見比べる

Ｃ：イタリアより日本の方がものの数が多い
Ｃ：靴の数は日本が多い
Ｃ：人形の数は日本１６、イタリア１９でした
　だから日本が多いといったのはちがう
Ｃ：それは人形だけでなく全体について言っているのだと思う
Ｃ：日本は洗濯機があるけどイタリアはない
Ｃ：日本は便利なものが多くイタリアは豪華なものが多い感じがする
Ｃ：日本はものに昔を感じる　イタリアは古いものでも新しさを保つ
Ｔ：イタリアは古さを感じないのですね　両方とも１９９３年に取った写真です
Ｃ：日本はごちゃごちゃ　イタリアはまとまっている
Ｃ：イタリアは必要最低限のものしかない気がする
Ｃ：（黒板に出てくる）日本とイタリアの看板の付き方がちがう
Ｃ：イタリアは棚に入っていてものがあまりない
Ｃ：日本がだんだん洋風になってきたようだ
Ｃ：イタリアは服がなくて日本のようにごちゃごちゃしていない
Ｃ：日本のお茶の間はせまく感じる　イタリアはテーブルが小さく見た目もすっきりしている
Ｃ：日本は散らかっている　イは倉庫や押入れがないと思う
Ｔ：物の数は日本が多いと感じた人？
　（挙手多数）
Ｔ：イタリアは家の中のものの種類は６００～７００日本は１２００種類だそうです

資料７　写真を比較しての子どもの意見

子どもの意見は、いろいろな観点から出されていた。いろいろな観点からものを見るおもしろさも味わわせたいと考えていたので、そうなることは予想していた。しかし、そこから自分たちの生活の仕方と結びつくように話し合いの観点を絞っていくことができなかった。子どもの発言の中には「便利なもの」「古いものでも新しさを保つ」「必要最低限のもの」といった、ものに対する考え方を深めることができそうなキーワードがいくつもあった（資料７）。そのキーワードから、観点を絞っていこうと考えてはいたが、絞りきれなかった。例えば「どんなものが必要最低限のものなのか」と子どもに問い返せば、自分の生活を頭に置きながら考え、生活とものへの認識を深めることができたのではないかと思われる。写真そのものについての話し合いを短くして、これまでの整理・整とんの学習と絡めながら自分の生活について考える時間をじっくりとれば学びが深まったと思われる。それでも、授業後「あゆみ」に生活の仕方のちがいを考えた記述があり（資料８）、整理・整とんとはちがった視点でものについて考える機会にはなったようだ。

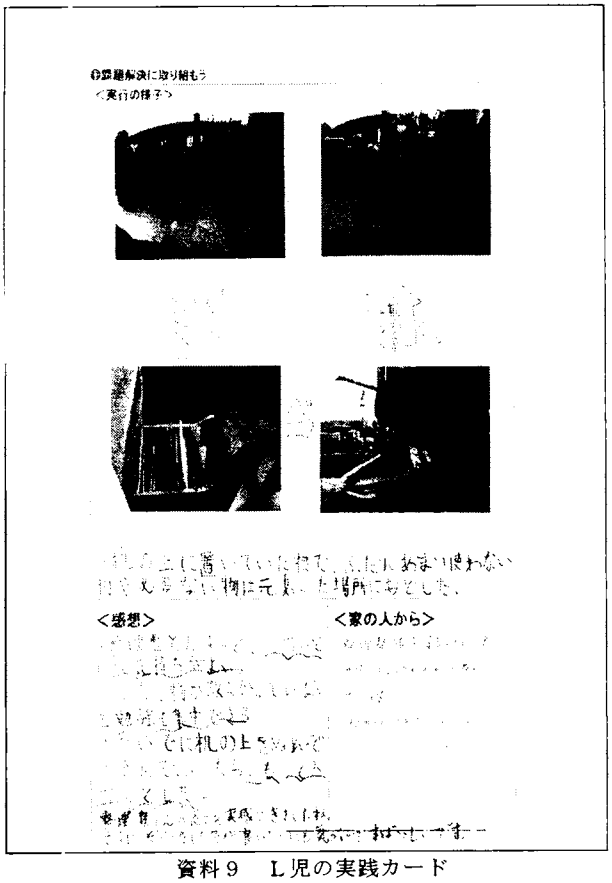
③　家庭実践を大切にする

子どもは、２週間の期間を設定して自分の課題場所について家庭実践に取り組んだ。実践の様子は子どもがそれぞれデジタルカメラで撮影したり図で表したり思い思いに記録してきた。実際の記録からは、子どもがこれまでの教室での実習や交流で学習したことを生かして整理・

今日５限目の家庭でイタリアと日本のものの数、見た目を比べました。イタリアの方はものが少なく余計なものなどがありません。でも、日本は余計なものなどが多く、ごちゃごちゃ。外国と日本でこんなに差があるなんてすごいと思いました。日本とちがう国の様子がぜんぜんちがうのでおもしろいと思いました。生活の仕方がちょっとちがうのかなと思います。

資料８　授業後のＫ児の「あゆみ」の記述

整とんを行ったことがうかがえた（資料９）。多くの子が「授業で交流し合ったことですっきりとした机になった」「スカッとして気持ちがよかった」「ものが散らかっていないと勉強も集中できる」「毎日心がけないと整とんは難しいことが分かった」などの感想を持った。家の人からもがんばりを認める言葉や励ましの言葉、アドバイスなどをもらい子どもは達成感を持つことができたようであった。そしてグループごとに実践交流を行った。お互いの取り組みや工夫を紹介し合うだけでなく整理・整とんしたところが今どういう状態であるかも話すように促した。いろいろな工夫を友達が行ったことに気づき、自分にも取り入れたいと次の実践への意欲を高めた子が多かった（資料10）。また、きれいな状態を保つには、出したものはその都度決まった場所に片づけることが大切であることも全体で確認することができた。



資料９　Ｌ児の実践カード

Ｍ児：自分が考えられないようなアイディアがあった　〇〇君の「ジャンル別」というのは自分もできると思う　友達ってすごい
Ｎ児：グループの人はみんな今の様子はきれいで整理整とんに心がけているのだと思った　私は床をしたけど机とかもみんなの意見を参考にやっていきたいと思った
Ｏ児：みんな今でも心がけているので見習いたい　隙間をなくすように片づけてきれいにしていきたいし自分も工夫したい

資料 10　実践交流の感想

④　見取りと評価のフィードバック

これまで述べてきたようにできるだけ自己評価、他者評価を取り入れて学習を進めてきた。また、グループでの話し合い活動や交流を多く取り入れた。それらのことから、友達の考えや方法を認めそれによって自分の考えを深めたり整理・整とんの方法をよりよくしたりしようとする姿が見られた。整理・整とんは子どもにとってはあまり関心を持って取り組む学習ではないが、友だちから認められることで学習意欲も持続したと思われる。しかし、もっと全体の場で個々のよさを認め広げたり意味づけたりすることが、個々の高まりだけでなくクラス全体として生活に関する見方、考えを深めていく上で必要であった。

(6)　題材を終えて

本実践で家庭科における学びを深めようとする思いとして「友達のよいところや自分でもできそうなことを取り入れようとする」「たくさんのものに囲まれている生活の現状や自分の生活の仕方を考えようとする」「友達のよいところを取り入れたやり方を生かして、整理・整とんしこれからも続けようとする」という意識が育まれるように学習を進めてきた。学んだことを自分の生活に生かそうという実践的な態度は少しずつではあるが子どもの姿に見取ることができたと考える。それは、友達との話し合いや交流など集団で学ぶよさによるところが大きいと思われる。今後家庭科だけでなく他教科の学習やいろいろな場で、互いに認め合う人間関係づくり、交流の仕方の工夫、話す、聞く力を高めることなどに取り組んでいかなければならない。また、生活への認識の高まりはあまり認めることができなかった。家庭生活と社会とのどんなつながりをどのように意識化させるか、題材とどのようにかかわらせるかなど題材の選び方、構成をより一層吟味していかなければならない。